

## その他の文書⑪

(比内文書続き)

やどすこみ

みなさん、ごぞんじの通り地ト天トヲかたとりて、ふふをこしらへきたるてな、と云ふ通り、天ト地ト和合しレバ、コノ世界な様ノものも生へ育つて居りまし。人間ノふふも誠と誠の、其合ふ所を、天のをやさまハ、うけとりて、一ト月目ニ国常立ノ神様ハ、ゑんずえと云フ、一て」(6ウ)

ぎのたね水を、やとしこんで下されまし。ソレカラ、二月目トナリまし。二柱目、於母陀流ノ神様ハ、ぬくみの御守護下されましから、一合半計りの血のかたまりとなりまし。ソコデにんしん、或ハにんたい、又たいにん共云フ。之ヲ二月ト云フことデありまし。ソレカラ三月目となりまし。三柱目ノ国狭土ノ神様ハ」(7オ)

皮筋ちなぎの御守護下されまし。ソコダカラ人間ハ美しエト云フも、みにぐゑと云フも、皮ひとへのかげでありまし。ソコデ三月ノせぐにハ、ひながだまつると云ふて、このひなの様だ、きれだ子供を与へて貰ひたひと云フテ、神にせづくと云フ。せくをすと云フことでありまし。ソレカラ四月目トナリまし。」(7ウ)

四柱目、月夜見ノ神様ハ、骨立自由ノ御守護下されまし。四月目ニハ、十二ヶ月をかだどりテ、大骨十二本、小骨一ヶ年ノ日数をかだどりテ、小骨三百六十本を入りこんで下されまし。ソコデ、カミガダテハ、四月八日ハ、うゑぢげ八日と云フて、神様ニだんごを、そないと云フことでありまし。ソレカラ五月目となりまし。五柱目、豊雲」(8オ)

野の神様ハ、呑み食への御守護下されましから、五月目ニ、腹の中の子供ハ、乳を呑むと云フことデありまし。今迄、四月目迄ででら乳ハでなくなりて、乳ぶさハ黒くなると云フことでありまし。ソコで、五月のセツクハ、しやうぶせくと云ふて、しやうぶさしたり、又登りと云フテ、こゑヲさけたり、又たご」(8ウ)

を、あげだりしと云フことでありまし。ソレカラ、六月目ニハ、六柱目、阿夜加志泥の神様ハ、見分け聞き分けさべ分け、万事かしこへ理をさずけて下されまし。ソコデ、人間一人前トナリましから、六ハどだへで、りぐつをはがるにも、六尺ヲ一問ト云ふ。六尺四方ヲ一坪と云フ。六ニ六ヲカケ、六六三十六町、一里ト云フ。六六三百六十日ヲ一ヶ年と云フ」(9オ)

ソゴデ、六月三十日ニハ、上形デハ、皆月いわいと云フて、いわいするそうでありまし。ソレカラ、七月目ニハ、七柱目ノ大戸之地ノ神様ハ、切ることノ御守護下されまし。七月目ニ親子の肉縁を切て下されましから、神様ハ人間ノふえるのを御喜び下されましから、七月ハ盆をどりと云フて、よへやなと」(9ウ)

云フ、よいよいのをどりがありまし。ソレカラ、八月目トナリまし。八柱目ノ神様ハ、ヒぎだしの御守護であるから、八月十五日ハ、いもうめゑ月ト云フて、ぢいぎのいもを神様ニ、そないまし。此ノ世に、親子の名のちへで、神様へ供へル者ハ、ちいぎのいも計りで、親ハ子ニなる、子ハ親となると云フテ、之ヲ供へルト云フことデありまし。」(10オ)

ソレカラ、九月目トナリまし。九柱目、伊邪岐の神様ハ、まず出ルニ早エカラ、ちこみの御守護下されまし。ソゴデ九月目ニハ、みもづ女ハ心付けナケレバナリマセン。子供ハ日分け聞き分け、何でも母のしること、なしことを、をばへしていると云フことであるから、九月のセツクハ、みわげきゞわげ、菊見のせく」(10ウ)

と云フテ、神ニせづくと云フ。せつくをするト云フことデありまし。ソレカラ、十月トナリテ、十月十日ニハ、此世へ生れたして下されまし。ソゴデ、十月ハ神なし月ト云フテ居りまし、十月の月ハ御守護御休ミたから、神なし月たと云フテ、アルト云フことテありまし。

以上である。その内容は、十柱の神の守護と出産に至る、習俗などに触れたものである。次に、

⑥「明治卅四年拾貳月廿二日 御古記 他見無用 萬願書」についてみていこう。これは、表題から明らかなように、それぞれ願書の雛型が書かれている。「御信符拝戴御願」「初席御願」「御本席御願」「集談所御届」「出張所御願」…と続く。この中、「初席御願」の願文に「右之者、明治三拾年拾壹月一日ヨリ第貳百六拾六号へ加入仕り、三十二年五月廿日第何号ノ講元、或ハ脇、周施ト相成候ニ付、日々尽力致居候處、今日ニテ満三年四月ト相成候間、今般初席願上度候ニ付、御試験ノ上何卒御取計被成下度、奉願上候也」とあり、別席を運ぶについての、当時の状況が窺われる。すなわち、別席を運ぶには、条件、資格が必要であった、ということである。それは、入信以来3年3月経過していること。さらに講元、あるいは講脇、周施であるということ。この2点を満たしてなお、別席を運ぶについての試験があったということになる。それも出張所、支教会、分教会と順序を追って、試験を受けながら、おぢばへと運んだのである。

続いて、「満席御言」と題された、今でいうところの、おさづけの理拝戴、書き下げの写しが記されている。次いで、明治33年1月25日「伊東宇三郎、三十才、身上御願」、明治34年2月4日「御本席様先日ヨリ御身上御障りニ付、願ノ處申上候、御休ミニなりてからと仰被下、御伺ふ致候得共、御一昨夜より、御障ニ付、如何の處でありましか、本日御願」のおさしづ写しが記され、あと阿仁出張所に関わる事情願が9件、大館出張所2件、南秋田出張所1件の事情願の書き下げ写しがある。

なお、明治33年1月25日の書き下げは、おさしづ7巻本には記載されていない。

次に、「神の最初の由来」と「神の古記」が入り混じったような話が記載されている。いうならば、天理教とは何ぞや、ということの説明するかのようである。もちろん、教えも語られているし、おやさまの事歴にも触れている。ただし、読めばわかるように、元初りのお話や事歴に、あれっと思うものもある。ある意味、それは当然のことであろう。これらは、どこまでも底本の写しであり、ときには聞き書きによつての文書なのであるから。ただ、おぢばより遠く離れた秋田の地で、こういう話が説かれていたという意味で、紹介するものである。お話の原稿であろうか。最初の箇所を翻刻してみることにする。

其れ此度天理王の命様と申まはるは、去る天保九年戌の十月廿四日の朝、天降り被下たる元の本なる、真実の親神様で御座りまして、此度、日柄年限うちり来て、しゅん刻限を以て、同廿六日、元の本なる地場を見定めて、我教祖様の身体を神の屋敷と借り受けになりまして、人間助け一条の道を教へて、三千世界二又となぎ道を御付被下まはる。夫れ此世界の本を知りたる者あるまい。如何な智者学者といへ共、本を知りたる者ハない。其のはぢや、説」(28ウ)

て聞かした事はない。知らぬがむりではないわいな。是迄道の道、種々様々と親神様入込で教へ被下たなれ共、本の本なる因縁を説き聞し被下たる事わかない。此度日柄年限写り来、しゅん刻限を待兼て、神様表へあらはれ被下まして、何かいさいをときゝかし、此所大和の地場の神形とゆふていれども、本はするまい。此世をはじめて神の云ふ事ハ、千二一つもうそわかない。夫れ世界元始メ、水の中から始めだし被下、九億九万九千九百九拾九年を一」(29オ)

一世年限を定め被下たるが始めて御座りまして、其年限うつり来りて、天保九年戌の十月廿六日朝の五つ時に、刻限、即チ教祖様四拾壹歳の御時で御座りました。其時、教祖様の身体を神の社ともらひうけになりまして、御談被下まはる二は、夫れ人間を最初始めだし被下まはるには、月日の神様深き御思召にて、人間と云ふ者を拵へ、此者を神の子として陽気ゆふさんの暮しをさして、其喜びを見て楽としたい、大茲大」(29ウ)

悲の御思召にて、伊邪那岐神、伊邪那美の神様を御頼みになり、種雛形苗代と定メ、又六柱の神様の心味ひを見渡して、道具と御頼み被下、伊邪那岐様には月様御入込み、伊邪那美様にわ日様入込被下、九億九万九千九百九十九人の数を北枕の西向にて、今なる御本部の甘露台様の地場にて、三日三夜に宿仕込み被下、三年三ヶ月を経て、五分と産み出し被下まはるの、人間始めだしじやと、聞してもらいました。しまして又一時」(30オ)

にむかいとりになりまして、其後わ十月十日を経て、産み出して一寸となりました。夫れより又、残らず迎ひ取りになりまして、又産み出しになりましたら、一寸五分となりました。其時に二神様此割合で成長なれば、天地の間世話の出来る者に成ると安んどう被下まして、につこり御笑に成て、御隠に相成ました。そこで最初人間宿し仕込み人数、九億九万九萬九千九百九十九年人一年ト御定め被下ま」(30ウ)

して、九億九万九千九百九十九年を一世年限と定めたと教いやると聞かしてもらいました、しまして人間生育は九億九万年の間、水の中にて八千八度び生れ返し被下ました。是を世にどろ海世界と云ふ。此五分より始メ出して、八千八度ひ生れ返し、五尺有余の人間として六千年の間は、岡へ引揚げ、事物を教へ被下ました。事物とは種々色々の道、色々の仕事を月日の神様初メ分道具色々とあらわす被下、残る三」(31オ)

千九百九十九年、凡、此四千年が間、学を教へ、道を教へ、恩報じの場所を拵らへ、其所其所へ月日の神様入込み、神道では八百万神、仏法では無量往仏と顕れ、人間の心助けたぎ御思召にて、千々に心を砕き被下、八神の和魂肉体と顕し、人間済渡の道を教へ、人の心やわらげの道を御付け被下ました。なれ共

教へをする物より崩して掛る。是故どうもならん。そごて此度元々人間の母親苗代と成て被下まはる伊邪那美様の神魂を勿体」(31ウ)

なぐも、大和なる三味田の草深屋敷に宿し込み、十三才の御年に、最初人間産出しの因縁を以て、今なる三島村元字を生屋敷村といふ中山善兵衛様の妻として五ヶの荷物を持って、振袖を御召に成て、御縁付に成りました。人間は知らね共、親神様の御思召で、最初人間産み出しの地場と人間初めだしの苗代との、元の本たる因縁を、親神様の見済しての後に、天降りての御咄しで御座りましてそふでし。そごて因縁を引寄せて、其」(32オ)行ひを身済して、御出二成た処がさしが我々の心とは事かわり、万事万端緩めなく、夫に仕へては貞女を守り、舅姑めは孝を尽し安堵を与へ、下女下男二至ル迄で、十分撫育を被下まして、一家親類は申に及ばず、他人様と雖も隔てなく、丁寧に取扱へ、人の難儀を我に引請、恵みの心深き御方で御座りました。しまして教祖様廿四才の御時に長男善左エ門様、是が若名を周治様と申ましまして、廿八才」(32ウ)

の御時に、長女政女様を御出産成りまして、すまして三十才の御時に二女安女様を御産に成りました。然るに世中の人、慈悲深き御方、乳沢山御座りまは、天理で御座りまし。是迄述べます通り教祖様、人に慈悲深き恵み篤ぎハ天性で御座りました。夫故、産をなさる度毎に三人前の乳がありました故、世に乳不自由の人には与へへなされて御出に成たそうだ。教祖様三十一才の御時に、同村に或ル他人」(33オ)

の子が乳不自由で、是迄度々子が出直しに成りました。然るに其時、又一子が出産に成りました。しかも男子なれども、同じく乳不自由で御座りましたそふな。故へ教祖様気の毒に御思召、御自身に乳沢山の処から、我に乳呑子も御座りましにも不拘、御慈悲の心増ぎして、御預りと成りました。然るに、其年の四月頃、天然痘がはりました処が、不幸にして預り子天然痘に御わずらいとなりました。処か十」(33ウ)

一日を隔て、不幸の中の不幸にして黒ぼうそと成りました。教祖様も驚き召されて、親本へも知らせず、医師を三人迄で御掛けなされた処が、医師の咄には、此黒ぼうそと成たれば、医師、薬も効能はなぎ杯との御咄し。夫故、只此上ハ神仏より外の便りハなぎと、我夫二も知らさず、親本へも心配さしてハ入らぬ事と、只御一人で諸所の神様へ願を掛け、我がご産様へハ、一百日のはだし参りの願を」(34オ)

かげ、其他奈良二月堂観音、肥田の薬師様、諸所へ、只一心不亂に御願成されまし様ハ、我の預り子様、此度ほうそうをにわらずらひに成りました。然るに十一日過ぎ不幸にも黒ほうそうと成りなされました。世の中にハ黒ほうそと成たれば、一命あやうき者と、昔より習うて御座りまはれど、若一命あやうぎ時には、御両親の難ぎは如何斗りと、おもわれまし。依而、何卒預り子様を御助け下されたし。なれ共」(34ウ)

(訂正:前稿で比内分教会の住所、米ノ山は「米ノ岱」で、会長名、吉田晋也は「吉田晋弥」の誤りでした。お詫び申し上げます。なお、文中に不適切な用語がありますが、歴史的史料として原文忠実を旨に翻刻しています。この点了解願います。)